

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 吉良 文孝

研究課題		主観的モダリティと客観的モダリティ
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究は、モダリティ (Modality) を「主観的モダリティ」と「客観的モダリティ」の2つに分け、法助動詞の統語的・意味的な振る舞いについて考察するものである (ここでいう主観・客観の別は、Lyons (1977) のいう査定、すなわち、心的態度の主観・客観をいうものではなく、発話と瞬間同時的な心的態度を「主観的モダリティ」とし、発話よりも前に構築されていた心的態度を「客観的モダリティ」と定義する)。モダリティに主観と客観を設定することによって、法助動詞の統語的・意味的な振る舞いが統一的に説明されることが大きな成果として期待される。一例を挙げれば、認識的モダリティを表わす can't (be) の否定辞 not が、「本動詞否定」なのか「助動詞否定」なのかについては、Halliday (1970) が本動詞否定として以来、議論の分かれるところである。これなども、モダリティの主観・客観の立場からいえば、「助動詞否定」としてよいただけの談話的証拠がある。否定現象のみならず、疑問化についても、この「主観・客観」の観点からの説明が有効であるという見通しがある。本研究は、「主観」・「客観」の観点から、法助動詞の振る舞いを統一的に説明することを目的とする。
	研究の結果	主観・客観の立場から、今回は、「否定」について (のみ) 考察した。認識的 can't (be) を「法性否定 (助動詞否定)」としてよい談話的証拠を示した。
	研究の考察・反省	Halliday (1970) の「認識的モダリティはゼロ以上の値を持つ」という概念に基づき、認識的法助動詞は否定されない、つまり、John can't be honest. は「本動詞否定」(「ジョンは正直者で <u>ないはずだ</u> 」) であり、「助動詞否定」(「ジョンは正直者である <u>はずがない</u> 」) ではないという主張がある。これに追随する文法家もいるが (例えば、安藤 (2005) など)、モダリティを「主観」と「客観」に分けることによって、認識的モダリティにおいてもモダリティそのものが否定されること (「助動詞否定」) があることを談話の観点から統一的に説明した。 本研究で援用した決定的に重要な意味概念は、安井 (2008) のいう「否定のモダリティ」はないが「モダリティの否定」は存在する」と、中右 (1994) の主張するモダリティの概念的定義にある「モダリティの瞬間的現在時」である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 「発表」、ならびに「研究成果物」はなし。	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	※開拓社より出版される『モダリティの立場から見た英語語法文法研究』(仮題) の1つの章 (「モダリティと否定」) において、本研究での「否定現象」を扱っている。	